

KEYワード

第103回

石川屋和助さん、商売うまいわあー 地車の宮入りを描いて版元の知恵



柳の下をこうもりが飛ぶ「四ツ橋」
〔浪花百景〕のタイトル
〔浪花百景〕より「四ツ橋」部分図
大阪市立中央図書館所蔵

暑いですな。愛染さんを口切りに、毎日、市中どこかで夏祭りのお囃子が聞こえる大阪の祭り月の到来だ。

「おおさかKEYワード」で、これまでもとりあげた「浪花百景」は、浮世絵師の一珠斎いちしゅうさい国員、南粹亭芳雪、一養斎芳瀧いっようさいが合作した錦

絵の揃い物で、幕末の大坂をテーマにした展览会やガイドブックの定番である。

『大阪人』2012(平成24)年5月号の特集「行こう大阪の名所いま・むかし」に文章を掲載したり、講演会で、私は何度も「浪花百景」の魅力を伝えようとしてきた。実に楽しい錦絵連作である。しかし謎も多く、大阪の夏祭りを象徴する天神祭のだんじりを描いた表紙の「天満天神地車宮入」もそのひとつで、様々な思案を重ねていた。

「浪花百景」鑑賞のために私が提唱しているのが、タイトル、絵師、版元名など文字情報を画の中に書き込んだ色紙型や短冊型の図案を、描かれている情景とからめて理解する方法である。

たとえば、四ツ橋の雨景を描いた作品では、タイトルの「四ツ橋」と書き込まれた色紙型に、柳とコウモリの絵が描かれている。これは橋の下や川岸の柳に沢山のコウモリが潜むことを暗示するもので、河川の交差点に架かる四ツ橋全体のイメージが膨らむことになる。こうした色紙型や短冊形の図案は百景図ごとに工夫され、言葉に頼らない巧妙な表現法として連作に彩りを加えている。

お囃子も賑やかに、だんじりが天満宮に宮入する表紙の「天満天神地車宮入」では、右上にタイトルの「浪花百景」「天満天神地車宮入」、左下に作者を示す「芳瀧画」と「石和板」の文字が記される。「石和」は、平野町通淀屋橋(現・中央区平野町)の版元・石川屋和助の略称だ。

すぐに気づくのが、これら色紙型・短冊型の

地紋が、だんじりを曳く講の人たちの揃いのゆかたと同じ、赤と薄紅色の格子柄であることだろう。文字情報を描くところの図案も同じにしたことで、画面全体の統一感が高められ、祭礼の熱狂や群衆の一体感が強調される。さらに、色紙型・短冊型には、ゆかたの柄がピックアップされ、拡大されている。そこには赤と薄紅色の格子柄に、たてよこに線を組み合わせた模様—文字?—が描かれているように見えるが、何を意味するのだろうか。これがなかなか解読できなかった。

答えを見つけたのが、湯川敏男さんである。大阪府立大学研究推進機構客員研究員もされ、大阪の伝統を汲んだ町の研究者といったおもむきの方である。私が講演会で「この問題が解けてません」とお話ししたことで関心をもたれ、正体を突きとめられた。

湯川さんによると、模様は家紋などで用いられる漢字を正方形に紋様化した文字の「角字」であるという。ここには二つの漢字が記され、画数の少ない字は「石」、画数の多い字は「和」の異体字「味」の角字と解読できた。「和」の偏と旁の左右を入れ替えた文字である。二文字を繋げると、模様はすなわち、版元・石川屋和助の略称「石和」となる。

ならば、曳き手のゆかたも講元ではなく、「石和」の角字が染め抜かれていることになり、「石川屋さん、商売うまいわあー」と思わずつぶやいてしまった。さりげなく色紙型や短冊型に「石和」を忍ばせるなど、この版元、なかなかのやり手である。

トム・ハンクス主演の映画「ダ・ヴィンチ・コード」になぞらえ、湯川さんは「浪花百景」の謎を「ヒヤックエイ・コード」と呼び、他の作品にも「石和」の隠し落款を発見して、『大阪春秋』第172号<2018(平成30)年秋号>で成果を公表された。湯川さんは、他にも様々な新発見をされており、「浪花百景」を愛する私としては、この揃い物の理解がぐんと深まっていくのがうれしくてたまらない。



「天満天神地車宮入」のタイトルと、それを見やすく描き起こしたものを。右上と左下が角字の「石」、他が「和」の異体字「味」。合わせて「石和」。

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼殿堂—なにわ 知の巨人—」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ—増殖するマンモス/モダン都市の幻像—』(創元社)など。